号外
北海道建築士
HOKKAIDO KENCHIKUSHI 2017.9.30

目次

第 42 回全道大会(後志大会)開催 ……1
A分科会……2
B分科会……3
C分科会……4

編集・発行:(一社)北海道建築士会
情報委員会
URL　http://www.h-ab.com/

ようこそ！　シリベシ　NISEKO　GLOCALの地へ
第 42 回北海道建築士会全道大会(後志大会)開催！

第４２回北海道建築士会全道大会が９月３０日、倶知安町にて開催された。後志管内の町村での開催は初めてで、大会テーマ「NISEKO　GLOCAL」サブテーマ～共生と連携のまちづくり～を掲げ、346 名の参加者が３分科会で熱い議論をくりひろげた。

大会式典は倶知安町文化福祉センターで開催され、大会実行委員長の榊後志支部長から後志支部の８町村、(倶知安町、京極町、喜茂別町、留寿都村、真狩村、ニセコ町、蘭越町、黒松内町）を代表して歓迎とお礼の言葉があり、多くのご来賓のご臨席のもと開幕した。

近年、ニセコエリアは国際観光リゾート地として変貌を続けており、外国籍の住民も増え、グローバルな日常生活である一方、北海道新幹線の開通に向けての工事、高速道路の延長決定等、観光や交通のハブ地としての期待が高まっている将来性、羊蹄山の水をはじめとした、ニセコ・羊蹄エリアの魅力とまちづくりが着実に進んでいる状況が紹介された。

最後にグローバルな視点とローカルな自然環境や生活文化が織りなす後志での大会が実り多きことを祈念して結びの言葉となった。

続いて、高野会長から後志大会への歓迎の言葉と共にご来賓、ご臨席の方々への感謝の辞が述べられた。

北海道の冬は雪の克雪から有効に利用する利雪、雪を楽しむ楽雪にも目を向けようになり、その最たるものが倶知安町の活動であったこと、「ニセコ町まちづくり基本条例」は全国初の自治基本条例となったこと、さらに、後志支部の「しりべし型住宅」「しりべし空き家ＢＡＮＫ」などの活動は大きな成果を上げ、まちづくりの先進地としての活動を称えられた。

また、既存の観光リゾート地とは趣の異なるロケーションの中、変容しつつある市街地、地球規模での大きな経済の動きの中でのニセコエリアの地域文化、歴史と人々の暮らしをどう捉えてゆくのかをテーマとした３分科会で「NISEKO GLOCAL」を実感してほしいと強調された。

最後に多くのご来賓の中から、須田北海道建設部建築企画監、西江倶知安町長、三井所日本建築士会連合会会長からご挨拶を戴いた。会長表彰、感謝状は 19 支部 38 名が受賞され、後志支部鎌田様が代表して感謝の言葉を述べられた。

基調講演は「限界集落からの脱却」－現実の「ナポレオンの村」－と題して、日蓮宗本證山妙法寺第 41 世住職の高野誠鮮氏を講師に迎え、町に眠る宝を生かして町を蘇らせたスーパー公務員の興味深いお話を戴いた。

A 分科会

街の原風景へ
『倶知安型住宅』官民連携の取組み

分科会が始まる前に、会場となった「倶知安風土館」を見学させていただきました。

ここでは、ニセコ・羊蹄の自然と、倶知安の歴史と暮らしの移り変わりを「見て・触れて・感じる博物館」として展示されております。エントランスに入ると昔懐かしの赤い郵便ポスト、中央にはレトロな年代物の乗用車スバル 360 が置かれています。

2 階に上がるとメインホールがあり、床は「倶知安空中散歩」として空撮の写真が一面に貼られていて、ドローン感覚で後志を一望できます。周囲の展示コーナーには、森に生きる動物たちや植物など、自然のいとなみとして剥製なども用いて展示されておりました。

倶知安と言えば雪、終わりを知らない雪です。スキーが初めて倶知安にもたらされたのが、大正元年（1912 年）交換将校として来日していたオーストリア陸軍テオドール・フォン・レルヒ中佐によって紹介されたのが始まりです。地元の人々には旭ヶ丘公園の小高い丘でスキーの技術を教えたそうです。

ゼロ戦の主翼の展示もありました。昭和 16～17 年の冬、ニセコアンヌプリ山頂付近の尾根下で、ゼロ戦着氷実験が行われました。展示されているのは、平成 15 年ニセコアンヌプリ山頂付近のササヤブの中で発見された機体の一部、ゼロ戦の右翼です。

その他にも、昭和 20 年代に実在した小学校の再現、呉服店の店先、当時の一般的な家庭の住まい、胆振線の寒別駅など、歴史の移り変わりを紹介しています。

さて、この雪深い後志地方。なかでも倶知安町、ニセコ町、京極町周辺は、羊蹄山やニセコ連峰に囲まれた自然豊かな地域です。

近年、外国人スキーヤーの人気が高まり、季節を問わず国際的なリゾート地として発展を続けています。

A分科会では、大会のサブテーマ～共生と連携のまちづくり～の実践例として、倶知安町の取組み『くっちゃん型住宅』のガイドラインを取り上げました。

自然景観や街並みとの調和、寒冷地を考慮した性能の確保、自然素材の積極的活用、住まい手への配慮などがコンセプトとなっています。ガイドライン作成・運用に当たっての経緯、取組み状況などについて、行政からは、倶知安町役場建設課住宅係の河野稔氏と実際に関わっている建築士会会員のエスワーク建築設計事務所代表の佐藤裕氏のお二方をコメンテーターとして、地域の原風景にふさわしい住宅ストックとなる住まいや、暮らし方についてお話されました。

スライドでは 70 代ご夫婦が「終のすみか」として実際に建てられた住宅を紹介。外壁に地元の木材、仏壇付の和室や内装にも自然素材を使用。室外機も目立たないように木材で囲う配慮もされています。

B 分科会

歴史的建造物の再生と
ニセコエリアのまちづくりを学ぶ

ニセコエリアは開拓期から農業が盛んで、ジャガイモ生産量は国内有数、また冬には極上のパウダースノーを求めて世界各地からスキーヤーが訪れるなど国際的な観光地となっている。そんな地域で進められているまちづくりの形を、地域で歴史を紡いできた建物群の再生という「ローカル」と、外国人観光客を通した地域からの発信という「グローバル」な視点から見てきた。

前半は各地区の歴史的資産の活用事例として、ＪＲニセコ駅前や温泉「綺羅乃湯」に隣接する「ニセコ中央倉庫群」を参加者各自が様々な視点から見学した。

中央倉庫群は昭和 6 年建築の石造り倉庫や昭和 40 年代建築のでんぷん工場など、地元農協が４年前まで使っていたもの。ここではニセコ中央倉庫群館長の向田薫氏からお話を聞いた。

「かつてここは羊蹄山ろくの農産物集積所として活気が溢れていた。その頃の町の賑わいを取り戻したい」と、地域コミュニティの拠点とし体験型イベント「ニセコ倉庫邑（むら）」の開催や、「ニセコ温泉部」として温泉の良さを発信するなどしている。向田氏は、”人が集うことでできる新しい繋がりがある、それを広げていくことで賑わいを取り戻したい”とのこと。

後半は、倶知安町の横関建設工業(株)代表の柏谷匡胤氏、(株)ニセコリゾート観光協会のドイツ人国際交流員のエマヌエル　ノイバウア氏、そして向田氏の３名によるディスカッション。

柏谷氏は雪を利用して倶知安町を売り出したいと、２０数年前に立ち上げられた「くっちゃん２１雪だるまの会」を引き継ぎ、東京、東北や札幌と真夏に雪だるまを運んで倶知安の良さを発信、ノイバウア氏は通訳や観光案内を通して外国からの観光客にニセコの風景の美しさを伝えている。

ディスカッションが進むにつれ、３氏がそれぞれの地域から「地元の良さ」を発信しているが、「地域だけの繋がり」からもう一歩踏み込むことでステップアップできるのでは？という流れから「広域連携からの後志ブランド」というキーワードが語られた。

ニセコ、倶知安、蘭越、喜茂別など広域で連携し交流することで、より深く NISEKO AREA の良さを知り、さらに大きな繋がりができ世界へ発信される。そんな相乗効果を期待するのも良いのではないだろうか。

C 分科会

新幹線が夢を運ぶ！！
～倶知安のまちを考えよう 2nd　Step～

2016 年 3 月 26 日に北海道新幹線が、新青森～新函館北斗間に於いて開業の運びとなりました。

そして、13 年後の 2030 年には札幌まで建設整備が着々と進められており、その通過点でもあります倶知安町にも新幹線駅が出来ることが決定している状況です。そういった、駅舎を含めた建設設備を鑑み、現在倶知安町では、各関係諸団体や新たな組織を立ち上げつつ、将来を見据えたまちづくりと位置づけ日々検討を繰り返し模索しているということです。

そこで、過去開催の 2015 年度の青年建築士の集い（後志大会）を 1 回目の開催とし、今大会を 2nd　Step として再度、色々な問題点や意見の収集を行うことになりました。

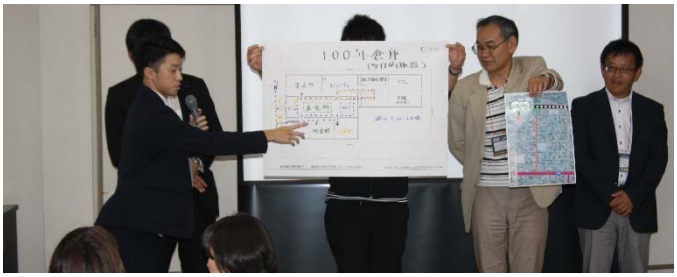
参加人数は 120 名程で一般参加者については、見学者の倶知安副町長をはじめ、ワークショップでは倶知安町役場の方々及び地元の商工会議所青年部、JC そして、建設業協会の皆様の 24 名が参加されました。

ワークショップ形式をとり 10 テーブルに分かれて、グループ内の役割等を確認しつつ、本大会のテーマでもあるグローカルという新たな一面も取り入れてのスタートとなりました。倶知安駅のまちづくりをキーワードとし、歴史的建造物【石蔵】の様々な視点で有効活用が本題となっていました。

あるグループでは石蔵の活用法として、若者を集った音楽(ミニコンサート)や食の部分でも石蔵の周辺を利用し人とのコミュニティ施設としての役割を担っては？ということで時間帯も含めた意見が出ていました。

ワークショップ中は、様々な意見が飛び交い、まとめていくという内容ですが、最後は 5 グループ程度が発表し、終始和やかな雰囲気で終了しました。

一般市民の方を交えてのワークショップとなりましたが建築士としての立場、地域住民としても連携したまちづくりが今後も発展することを強く望みます。



編集後記

羊蹄の麓、緑に囲まれて壮大な自然や歴史を感じながら、これからの未来への夢が沢山詰まった大会となりました。

今年も編集を終えて一安心。来年は士別でまたお逢いしましょう。

編集発行／北海道建築士会情報委員会
早川陽子・斎藤　勝哉・森　勝利・高松　徹
熊谷　智・柳山美保子・鈴木雅人・柏倉晶憲